

ポジティブ行動支援 (PBS)

実践事例集Ⅳ



01

学級経営に
PBSを!

02

広がりを見せる
中学校の実践

03

PBSの手法を取り
入れた授業づくり

04

校長室から
PBSを想う

05

「とくしまPBS
アワード」レポート

徳島県内の幼稚園・小学校・中学校・中等教育学校へポジティブ行動支援の考え方が広がった今、「ポジティブ行動支援を徳島のあたりまえに」、これが次のステージへの合言葉です。

ポジティブ行動支援が、特別なものではなく、生徒指導、人権教育、学級経営、授業づくり等に溶け込み、子どもと先生の日常の「あたりまえに」なってほしい。そんな願いを詰め込んだ1冊です。ぜひ、ページを開いてみてください。



01 学級経営にポジティブ行動支援を！

PBSを日々のスタンダードにする

徳島県では多くの学校でSWPBSが実践されていますが、ポジティブ行動支援（PBS）は、学校全体で取り組むキャンペーン等だけではなく、日々の授業や学級での生活面の指導でも実施できます。PBSのポイントには、①望ましい行動を具体的に決めて教え、②その行動が引き出されるような環境を設定し、③その行動が実行できたときにはポジティブなフィードバックとして、それを承認・称賛する関わりを増やしていくことです。①②③を含めたPBSの実践は、キャンペーンという特別なイベントにしなくても、毎日の指導・関わりの中で行うことが可能です。また学校全体で作成したマトリクスをもとに学級でも取り組むことで、「育てたい子どもの姿」は一貫しながらも、発達段階や学級の実態に合わせた取組が可能になります。

以下に紹介されている実践事例は、まさにPBSを日常的な指導や学級経営に取り入れたものです。「ここから見えてくるのはPBSが特別な活動ではなく、教師にとっても児童生徒にとっても毎日の中の「あたりまえの実践」「学校の文化」となっていることです。「教えなくてもそれくらいわかるよね」「できて当然なんだから褒める必要はないよね」といったこれまでの考え方を一変し、「誰にとってもわかりやすく具体的に教える」「望ましい行動に繋がる環境をつくる」「できて見えていることを見逃さずに褒めて承認する」ことをあたりまえにするのがPBSによる学級経営です。



川島小学校では、特別支援教育巡回相談員のサポートのもと、昨年度に、ポジティブ行動マトリクスを作成し、SWPBSと学級経営とを結びつけた取組を推進しています。

みんなで目線をそろえチームで歩む

教職員が新メンバーになったこともあり、6月の校内研修において、マトリクスの見直しを行いました。昨年度の振り返りで達成できている行動をどうするか、引き続き大切にしたいものはないか、今年度の児童の状況に合わせて追加・変更するものはないか。このような視点から、こんな姿に育ってほしいという児童への思いを全員で話し合い、新マトリクスが完成しました。この中から、学校全体で優先的に取り組むたいものと考え、「話を聞く」という行動について、学級経営の中で重点的に取り組むことにしました。7月、「話を聞く」という行動について、各学級ごとに具体化し、目標や手立てを考えて、2学期から各学級単位での実践を開始することとしました。各学級の取組の成果

川島っ子チャレンジプロジェクト

	ほんきでやり隊	すてきになり隊	むてきになり隊
低学年	○もくもくタイムは、静かに取り組もう。 ○相手を見て終わりで話を聞こう。	○あったか言葉で1日3回以上使おう。 ○友だちのいいところを毎日見つけよう。	○次の時間の学習準備をしよう。 ○チャイムの合図を守ろう。
中学年	○「はい」と返事をして自分の考えを相手に伝えよう。 ○相手を見て終わりで話を聞こう。	○あったか言葉を毎日使って増やそう。 ○すすんであいさつをし合おう。	○室内では静かに過ごそう。 ○学習準備を整えて、チャイムの合図を自分の座で聞こう。
高学年	○自分の考えを伝えよう。 (1日1回発表することから始めよう) ○話している人を尊重する心をもって聴こう。	○あったか言葉を広めよう。 ○適切な言葉遣いで話そう。	○廊下や階段で他学年のお手本となる行動をしよう。 ○授業開始1分前には着席しよう。

教員の思いを形にした「ポジティブ行動マトリクス」

<各学級の行動目標>

- 1年 説明が終わってから、発表の挙手や質問をする。
- 2年 (後述)
- 3年 話し手に目・耳・へそを向けて心で話を聞く。
- 4年 友達の発表は体を向けて聞く。
- 5年 話をしてる人を見て話を聞く。
- 6年 手を止めて先生の方に目を向ける。

報告会では、学級自慢や他の学級のいいところを伝え合うなど、ポジティブなフィードバックを教職員間でも行いました。

「目から鱗」の担任の気づき!



え〜っ!!
あたりまえにできている行動を褒めてもいいんですか? 静かに話を聞くのはあたりまえの行動なので、今まで特に気にしていませんでした。

大対先生からのアドバイス



先生の話や聞く場面と質問をする場面で、正しい行動ができるように合図を出しましょう。子どもたちがルールを守らず質問をしたときに先生も思わず答えてしまい、ルールが無効になってしまうので要注意です。まずは先生がルールに対して、一貫した対応を行いましょう。

担任の悩み



授業中、児童が□々に自由に質問するので、ざわざわしてなかなか落ち着かないなあ・・・
井後 亜弥子 教諭

2年生の行動目標

- ①先生の説明時には静かに終わるまで聞く。
- ②質問があるときは手を挙げて当てられてから質問する。

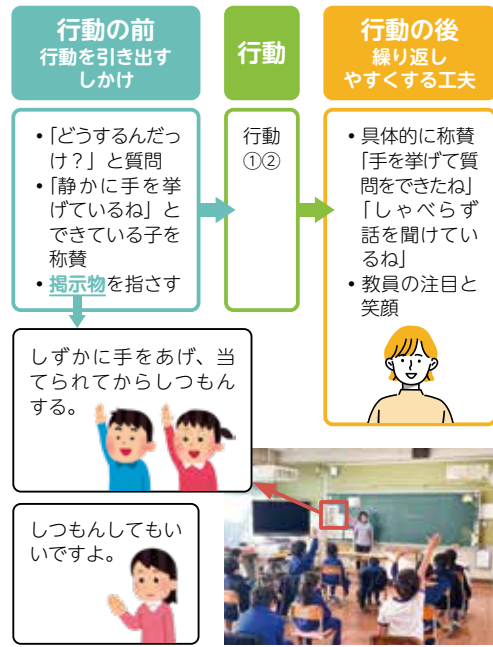
2年生の「話を聞く」の取組は、近畿大学の対香奈子先生からアドバイスをいただきながら進めました。その取組を紹介します。

※ポジティブ行動マトリクスについての研修用動画があります。二次元コードからご覧ください。



ちよつとしたエッセンスで 学級経営全体への効果絶大

行動目標①②を増やすために、次のようなしかけを考えて取り組みました。



児童を褒める行動を教員自身が増やそうと思つたときは、児童の行動を丁寧に観察し、意図的に実行する必要があります。井後先生は、褒めるモードのスイッチを入れて授業に臨むようにしたところ、コンサルテーション前後で、一授業内の称賛回数が数倍に増えました。行動を引き出すしかけにはリマインド効果があり、ルールを思い出し、自分の行動を正すことができる児童が出てきました。また、褒めるときは具体的に「静かに待っているね」などと言うことにより、児童は「さすれば」○^{アル}「なのかが明確になり、行動が劇的に変化していきました。授業中、口々に話していた児童たちが教員の話最後まで聞いたり、全員が活動に集中したりと、学級に静けさが生まれました。その結果、児童たちはより学習へ注力できるようになりました。

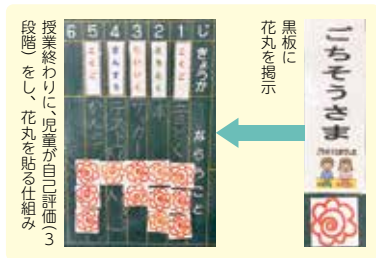
この実践は、日常的にあるごくあたりまえの行動にアプローチした取組ですが、「話を聞く」というたった一つの授業規律を整えるだけで、学級経営に好循環を生み出せることを教えてくれています。

学級経営にPBSを取り入れた実践紹介

橘小学校では「あいさつ・返事・ありがとう」の三つを大切にされた教育活動を推進しています。9月の校内研修会では、そのうちの一つである「あいさつ」をテーマに、各学級ごとに実施計画表(左図)を考えました。

1年生では、「食事の前と後のあいさつをしよう」を行動目標に設定しました。取組開始前に、あいさつをする意義や評価基準を児童にわかりやすく教示しました。また、できたら花丸1個ゲット、10個貯まればお楽しみ給食(座席を口の字型にして食べる)をすることも予告しました。その結果、あつという間にこの目標を達成しました。そして、この仕組みを学級独自で発展させ、「授業に集中して取り組む」という目標にも取り組ましました。4時間目に「疲れた」と言い出す児童が減つたり良い姿勢を保てたりするなど、目に見えて良い効果が表れています。

今回の成功の秘訣は、取組開始前の教示にあります。「先生が決めたこと」ではなく、児童が主体的に「やってみよう」と思えるようにいかに話を運ぶかが、教員の腕の見せ所であり達成への鍵です。以前にも教員主導で花丸を取り入れていたそうですが、効果は薄かつたようです。また、あいさつの取組を達成した経験が次の目標の動機づけになるというサイクルが生まれています。達成しやすい目標からスモールステップで、徐々にめざす学級像へと近づけていくことも大切です。



1 食事の前(行動)を覚えよう	食事の前と後のあいさつをしよう
2 食事の前後(行動)を覚えよう	感謝の気持ちをもち食べる方が気持ちよく食べられるから
3 評価基準を考えよう	食べるとスタートとゴールがはっきりするから。
4 目標の達成を考えよう	大人になって、食事のマナーが身につくとカッコいいから。
5 取組方法を考えよう	花丸を貯めるとき、「いただきます」のイラストの上に目印を書きつけていく。

1年生の「具体目標の実施計画表」
9月の校内研修の際、低学年グループで意見を出し合つて作成

三好中学校では、級友への言葉遣いや人間関係のトラブル等の課題がありました。そこで、学級経営にPBSの視点を活かし、「目で見てわかる基準で生徒を褒めたり認めたりする機会を増やすこと、良好な人間関係を築くこと」をめざし、2学級で実践を行いました。学級活動の時間に、生徒達が「学期の目標」として行動目標や計画を考えました。

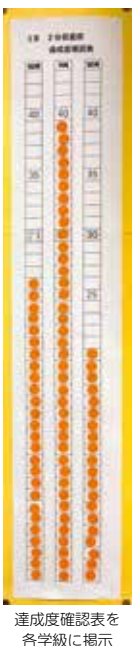


2分前着席ができた	1 ポイント
2分前に着席し、次の時間の準備ができた	2 ポイント
2分前に着席し、今日の学習するページを開いている	3 ポイント
.....	
・1日1回教科担任がいずれかの授業でチェック(予告なし)	
・目標は1ヵ月30ポイント	
・目標を達成したら、宿題が減る	

教員からの言葉かけがなくても、多くの生徒が2分前着席ができるようになりました。2ポイント、3ポイントを獲得できる日が増えていき、3ヵ月目の12月には両学級で目標を達成し、喜びの声を上げる生徒の姿が見られました。学年団の先生方も生徒のよいところへ目がいくようになり変りました。

まだまだ取組半ば。着席が難しく個別的な支援を要する一部の生徒への対応や、宿題が減ることがメリットになりづらい生徒に対してモチベーションを維持する方法については、さらなるアプローチが必要です。しかし、やって初めて見える課題があり、それを改善する次の手立てを講じることで生徒たちは伸び続けることができます。「生徒同士が声をかけ合うこと、生徒が主体的に取り組む、達成感を味わえること」というさらなる高みをめざして先生方の取組は続きます。

「こうなりたい」「こうなりたくない」という思いを大事に、生徒と教員が共に試行錯誤するプロセスこそが、価値あるものなのです。



執筆・監修 大対 香奈子(近畿大学准教授)



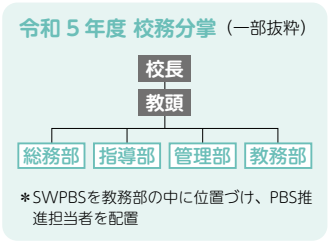
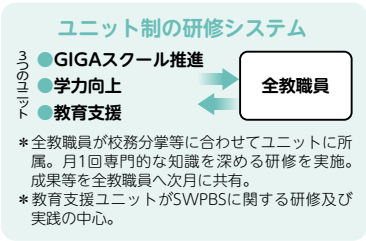
鴨島東中学校では、「生徒指導上の問題行動は少ないが自己肯定感が低めである」「問題の解決に粘り強く取り組むことが難しい」といった生徒の現状がありました。そこで、「生徒の自己肯定感を高めたい」「生徒達が主体的にいきいきと活動する姿を増やしたい」という教員の願いを実現するために、本年度から、SWPBSを学校運営計画の中に位置づけ、取組を推進しています。実践を進めるに当たっては、大阪教育大学の庭山和貴先生からアドバイスをいただきました。

「R4」PBSの手法の理解と その効果を実感

一人の生徒の問題行動の改善に向けて、PBSの手法を取り入れ、1学年団で事例検討会を実施しました。生徒の行動の変容ぶりにその効果を実感。他の学年へと事例検討が拡がり、PBSの有効性を先生方が認識しました。また、ポジティブ行動支援マトリクスを作成するとともに、人権・いじめ防止委員会や生徒会と共同した実践を行いました。

「R5」校内組織を再編、教員と生徒が一丸となって

「自尊感情の向上」と「学力向上」を中核に、教員の願いと生徒の思いを融合させたポジティブ行動マトリクスに再編しました。チーム学校で取組を進めるための策として、校内組織と研修スタイル（ユニット制）を刷新しました。この策は、取組に教員全体を巻き込むとともに、継続的な実践を支える要となります。



東中生キラキラ☆プロジェクト2023

夏休み、生徒会役員が集まり、「こんな目標にするとよいのでは」「これなら全員ができそう」などとポジティブ行動マトリクス作成に向けて意見を出し合いました。

生徒会が学校全体を進める行動目標を設定しました。また、育てたい生徒の姿を共有し、教職員が学年ごとに目標を設定しました。



生徒会を中心としたプロジェクト

行動の前 行動を引き出すしかけ	行動	行動の後 繰り返しやすくなる工夫
①生徒会長が集会で呼びかけ ②取組の説明動画を制作し放映 ②動画のワンシーン ④表に係が記入 ⑤瓶に貯めたピー玉 ⑥付箋紙にコメント 	2分前に着席する	③授業前に教科担任がチェックし、8割できていたらビー玉で賞賛 ④各学級のビー玉獲得数を表で掲示 ⑤各学級のビー玉を集めて玄関の瓶に蓄積 ⑥生徒会役員による励ましコメント

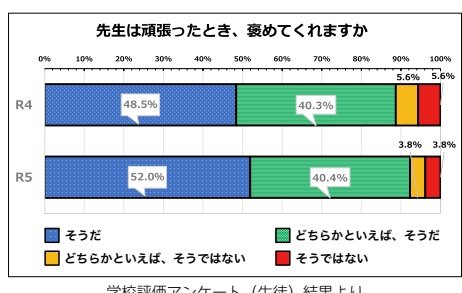
	あきらめず考えよう	思いやりを行動に移そう	元気に・前向きに取り組もう
朝目習	時間いっぱいセミナーの問題を解いたり、読書をしたりしよう	セミナーが配られたら、後ろの人にすぐまわそう	1年 背中をピンと伸ばして座ろう
授業前	生徒会 2分前着席をしよう	周りの子に授業の用意や2分前着席を促そう	2年 授業が終わったら次の時間の準備をしてから休み時間にしよう
授業中	3年 分からないことは調べたり、先生や友達に聞いたりしよう	話し合いの時間、分からない子がいたら教えよう	自主的に手を挙げて、発表しよう

教員案と生徒案を教育支援ユニットが統合したポジティブ行動マトリクス(一部)

客観的データから見る成果

生徒会と学級の同時展開の実践成果は、学校評価アンケートに表れました。教職員からは、「各目標を具体化したことでゴールが明確になった」「結果が視覚的にフィードバックされ励みになった」という声が上がりました。また、生徒へのまなざしがより温かくなりチーム力がアップしました。生徒会役員は学校生活を様々な角度から見て、積極的に意見を述べるようになりました。自分たちの手で「こんな学校をつくる」という意識が高まりつつあります。

鴨島東中学校の実践では、まずPBSを推進していく校内組織を明確に校務分掌に位置づけたところが成功の要因だと考えられます。PBSの実践・研修等をこれまでの業務にプラスするのではなく、可能な限り既存の業務・校内組織に統合・置き換えることにより、無理のないPBSの推進が可能となります。



もう一つ重要なポイントは、生徒の参画です。鴨島東中学校では、ポジティブ行動マトリクス作成の段階から、生徒会が参画しています。あらかじめ決められた目標ではなく、生徒が作成段階から主体的に関わり、その意見が反映された行動目標にすることは、生徒の「やってみよう！」を引き出す上でも大切です。

執筆・監修 庭山 和貴 (大阪教育大学准教授)

臨町小学校では、平成30年度からSWPBSを学校運営に取り入れています。本年度、大阪樟蔭女子大学の田中善大先生からアドバイスをいただきながら、学力向上の視点から、PBSの手法を活かした**算数科の授業づくり**に取り組みました。

担任の
悩み



授業中、私語をしたり手遊びをしたりと、授業に集中できない日があります。算数科の授業は単調になりがちで、子どもたちに活気がありません。

授業中、挙手して発表する活動が中心で、一部の児童のみが注目を浴びがちです。ペアやグループワークで、活発な話し合いができるようになってほしいです。また、話を聞くときは手を止めて聞けるようになってほしいです。 井内 洋介 教諭

算数科の授業の様子を、6月から12月まで毎月1回、田中先生に見ていただきました。

田中先生
からの
アドバイス



先生に注目してもらつたために問題行動をしている子どもがいます。「先生が指示を出して、児童全員を動かして確認し、称賛する」という子どもが動く機会を細かく設定しましょう。

- 全員が「できた」で終わる授業設計をしましょう。
- 授業の終わりに確認テストを行い、授業のめあてが達成できたか否かを確認しましょう。
- *手立てがうまくいっているか否かについて記録をつけ、可視化しながら進めましょう。

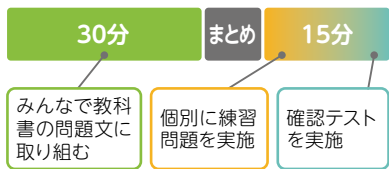
全員がアウトプットする機会の設定

授業の中に、ペア活動等の全員がアクションできる場面を小刻みに設定しました。例えばめあてや問題文を読む際、窓側と廊下側の児童に分けて読むようにしたり、起立するようにしたりと、アレンジを加えました。参加方法を変化させマンネリ化を防ぐことで、児童が活発に活動する姿が見られるようになりました。他児を待ったり、話を聞くだけの時間が減り、全員が同時に活動する時間が増えました。「ペア活動とサインで意志表示」を組み合わせて取り入れたことで、普段は挙手しない児童が手を挙げ発表するようになりました。

教員は、指示や内容の理解度を児童の行動を見て細かく把握できるようになりました。児童が動く場面が増えた分だけ、全員を称賛できる機会も増加しました。

確認テストで「できた」がゴール

授業の流れを変更し、本時の「まとめ」を、授業の最後ではなく、練習問題前に行うようにしました。「まとめ」を用いて練習問題を解くことで、解答の流暢性を上げることができるようになりました。練習問題中に、机間巡視をしながら、つまづいている児童には個別に支援を行いました。つまづきを先に修正しておくことで、確認テスト（練習問題の類似問題を1〜2問設定）を一人でできた児童が常に全体の9〜10割という高さを維持できました。



サインで意志表示できたことを担任が称賛する

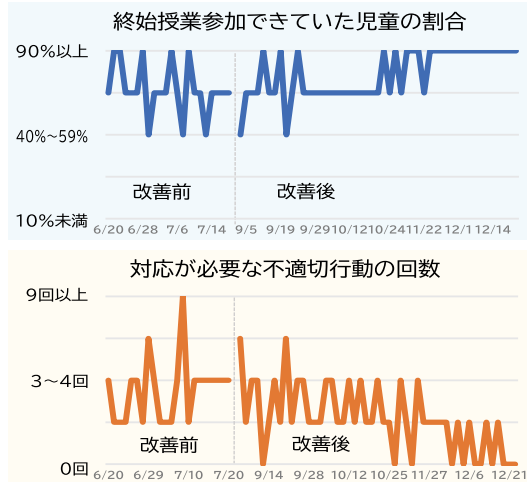


ペア活動で級友から承認を得る

まずはペアで答え合わせや意見交換をする。

次に、サインで意志表示する。意見が同じペアは「1」、違うペアは「2」を挙げる。

データから見る児童の変容



日々記録をつけることは、児童の様子への気付きとなり、教員自身の授業の振り返りになります。取組を通して、問題行動が減り、ほとんどの児童が授業に終始参加できるようになったことを実感できました。



井内先生が実践された取組は以前の実践事例集Ⅱ(P2)で紹介したPBSに基づく授業づくりの鉄則に基づくものです。ここでは、アウトプットする機会を設定する際のポイントについて解説します。アウトプットの機会は、行動から各自の理解の状況(わかったかどうか)を確認する機会でもあります(鉄則)「わかりました(安心しない)」。もしここで、行動できなかったり、不正解の行動をしたたりした場合、その児童は「わからない」状態であることがわかるので、そのような児童を積極的に発見し、支援を行っていくことが重要です。

授業の中で、わからなかったり、間違ったりしても、それを先生や友達と共有して、一緒に解決できるようにすれば、クラス全員が「できた」となる可能性は大きく高まります。そのためにも、アウトプットの機会を行動しようとして(チャレンジして、わからなかったり、間違ったりした場合に、そのことが批判されたり、叱責されたりすることのない環境づくりを行う必要があります。アウトプットの機会が効果的に機能するためには、安心してチャレンジできる環境づくりが重要なのです。

執筆・監修 田中 善大(大阪樟蔭女子大学准教授)

※「手法」については実践事例集Ⅱに解説があります。二次元コードからどうぞ。



吉野川市立川島小学校 山口 詳一 校長先生

PBSは「子ども先生も笑顔になれる取組」だと確信しています。私とPBSの出会いは、加茂小学校でした。それまでも、困難を抱える子どもの背景に寄り添い、よいところを見つけて褒めるということは大切にしていましたので、褒めて育てるという視点はものすごく共感することができました。PBSでは、行動を数えて数値化します。正直なところ、最初は、「廊下を走っている子どもの数をカウントする・・・？」という思いをもちました。ですから、ベースラインをとるといふ部分にもものすごく抵抗感がありました。しかし、取組を進めていくうちに、行動目標を達成していく過程を数値化して、変容を可視化することで、子どもたちを効果的によりよい姿に導くことができることを学びました。

PBSに取り組んで3校目になりますが、前任の大規模校でも、研修後には先生方と子どもたちの変容を見ることができました。今は、学校の現状に合わせてできることを推進すれば、必ず先生も笑顔になるし、子どもも笑顔になるというゴールは見えています。

川島小学校では、私が赴任する前から取り組んでいたSWPBSという素晴らしい手法を確立するために特別支援・相談課ならびに特別支援教育巡回相談員や大学のプロジェクトチームの先生方の指導の下で、研修を重ね実践に取り組んでいます。おかげで、一人一人の子どもの教職員みんなが一つになって関わることできたと感じています。昨年度、1番最初の取組が「あつたか言葉を広めよう」でした。現在の6年生の児童が「あつたか言葉」というグラフを作った、あつたか言葉を広める行動を起こし、生活のきまりを見直したときは、「あつたか言葉を昨日より増やそう」というめあてを掲げたいという声が出てきました。子どもたちの変容はなかなか見えてこないものですが、このように優しい行動を増やしたいという心情が、子どもたちから出てきたことは大きな成果でした。また、SWPBSを進める中で、年間を通じて教職員が話し合ったり協働したりすることが増えました。中には、先生方の助けになればと紹介した本を職員室に置いたり、個別的な支援が必要な児童についてうまくいった支援方法を共有し合ったりすることができています。先生方の意識が同じ方向に収斂していく職員室の様子を頼もしく感じています。

今後は、PBS推進リーダーやPBS推進チームを校内に設置し、それらが中心となってPBSを推進していければと考えています。推進チームがうまく機能するようにどのように支援するかという点、管理職としての私の役割だと考えています。

美馬市立脇町小学校 大塚 一志 校長先生

平成29年度、学級崩壊の危機がありました。その対応策として、平成30年度からポジティブ行動支援の研修を開始しました。教員間で課題や目標を共有し「一冊3つの約束」が誕生しました。

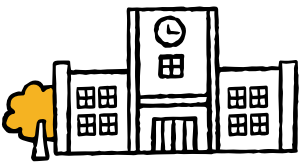
1年目はPBSがどういふものかを教職員がきちんと理解するのに時間がかかりました。浸透した今なら、「寒い中、学校へよく来たね」と、あたりまえのことも褒めることが普通にできます。でも、当時は、例えば、トイレのスリッパは並べてあたりまえ、儀式に制服を着てくるのはあたりまえ、このあたりまえのことができていなかったら注意していました。チェックして注意するのは、それとできていた所を見つけて褒めて広げていくのが、先生方に迷いはあつたと思います。1年目は、我々教職員の人的環境を作っていくことからのスタートでした。

去年今年で1番大きく前進したのは、4月の新組織職員会で、PBSを基盤にして学校経営をすることを教職員に示す事ができるようになったことです。職員室の黒板にも「ポジティブ行動支援で安全・安心な学校づくりを」と掲示しています。先生方の中には、叱ってはいけないのかと迷われる方もいたので、終礼で、「ダメなことはダメときちんと指導はしてください。特に人権問題やいじめ等、毅然と指導するところはしてください。ただし、指導したことがちょっとでもできるようにしたら、見逃さず褒めてやってください。」と伝えたこともありました。

PBSを推進するコツは、まずは私自身が褒めることです。毎週の朝会では、子どもたちのいいところを発信しています。朝会は必ず先生方も聞いているので、子どもを褒めるその裏に先生方への理解を広げるといふねらいもありです。校長としてこういうことを大事に考えているというメッセージを、子どもたちだけでなく先生方にも送っているつもりです。

PBSを継続してきたことで、教員と子どもとの信頼関係が築きやすくなり学校運営が安定しました。授業を進めやすくなり生徒指導も浸透しやすくなり、保護者も安心して子どもたちを預けてくれていると感じます。「あつたか言葉」の取組を継続的に実施することで、子どもたちのトゲトゲ感が減り確実に穏やかになっていると思います。

PBSは「教員の基本姿勢、スタンス、教員が子どもを大切にできる姿勢」です。子どもの人権を守る、子どもの良さを伸ばす、子どもの思いを大事にするという姿勢があれば、その教員は必ず伸びます。教員としての姿勢を、PBSにより全ての教職員で揃えたいと考えています。



吉野川市立嶋島東中学校 川真田 宏 校長先生

以前、小学校で勤務していた方から、PBSの実践により、学校が変わったという話を聞いたことがありました。それ以来、自分が学校を預かる立場になったときは、是非、学校全体で取り組もうと考えていました。学級担任であれば、誰もがよりよい学級をつくりたいと願うはずですが、私は校長として、先生たちのその思いを後押しするとともに、生徒、保護者、その他学校に関わるすべての人々にとって、魅力のある学校をつくるために、PBSを導入しました。昨年度は、年度当初にPBSを学校の重点課題とすることを職員に伝えた後、その意義や手法についての研修に主眼をおきました。校内研修に市教育相談所研究員や特別支援教育巡回相談員を招き、講義だけでなく、演習もお願いしました。このことで、随分と職員への理解が進んだと感じています。

さらに、今年度はSWPBS担当を校務分掌表に明記したほか、少人数のユニットによる研修スタイルを採用するなど、校内組織づくりに努めました(3P参照)。中学校は教科の壁があったり、放課後も全員が揃いにくかったりと、一斉研修が困難な部分があります。しかしながら、全職員が同じ思いをもち、力量を高めてほしいという思いで研修のあり方を刷新しました。

PBSは生徒指導や人権教育だけでなく、学力向上をも含めた全ての教育活動を支えるものです。私は、PBS自体は「主役」にはなれないかもしれないけれど、様々な取組を下支えするものだと捉えています。現在、本校では生徒指導上の課題は少ないのですが、一方で簡単に諦めてしまい、粘り強く考えることが苦手な生徒たちがいます。PBSの導入には、これらの生徒たちの良さを引き出し、自己肯定感を向上させつつ、学力の向上に繋げたいとの願いもありました。生徒たちには様々な効果がありました。12月末に実施したアンケートでは、「先生はよく褒めてくれるか」「学校が好きか」との問いに肯定する割合が上がりました。生徒会役員選挙に多くの者が立候補し、ある候補は「学校は先生たちのものではなく、生徒たち、私たちがつくっていくものです」と訴えるなど、自分たちにもできる「この学校にしたい」という志が、生徒たちに育ちつつあることに、とても嬉しくなりました。

職員にもいくつか変化がありました。例えば、研究授業の際に個人の作業になったとき、見学していた先生たちが生徒に話しかけ、生徒もそれに応える姿がありました。生徒に向けるまなざしが優しく、互いの関係がよくなったと実感しています。ユニット制に関しても、職員室で隙間時間に相談する姿がありました。

今後は、ポジティブ行動マトリクスを改めながら、生徒会活動と連動させ、目標を生徒自身が考え、展開する取組へと発展させたいと考えています。そして、PBSが決して特別なものではなく、全ての学校で「日常」となることを願っています。



初めて行われた「たくしまPBSアワード」には、小学校から8つ、中学校から2つの応募がありました。どの取組も、PBSに熱心に取り組んでいる「たくしま」らしいものばかりで、審査員にとっては頭を悩ませがちな「審査」も、自然と笑みがこぼれてしまう楽しいものでした。

「たくしまPBSアワード」は、各園・校におけるPBSの実践をエンパワーすること、具体的な実践事例を共有することが大きな目的です。児童生徒や教職員・保護者のみなさんの「PBSの実践」という行動のモデルとして（引き出す工夫）、また、「PBSの実践」という行動を承認・賞賛する方法として（繰り返しやすくする工夫）、「たくしまPBSアワード」は大切な役割を果たすものだと思います。このアワードのように、児童生徒や教職員・保護者のすばらしい取組が、「あたりまえに」承認・賞賛される環境が広がり、続いていくことを期待しています。



審査員からの総評

徳島県内のPBSの実践事例の蓄積と発信を目的として、本年度から「たくしまPBSアワード」を実施しています。「動画部門」と「エントリーシート部門」を設け、オリジナリティあふれる実践を表彰しています。このページでは、ゴールド賞と審査員特別賞に輝いた取組を紹介いたします。

表彰式では受賞者から「自分たちの取組に対して賞をいただけたことがPBSである」「学校を良くしたい」という子どもたちの思いを、持続可能な形でサポートしていきたい」といった熱いコメントをいただきました。



たくしまPBSアワード表彰式（特別支援教育実践研究報告会にて）

吉野川市立高越小学校

児童発信のPBSプロジェクト

学校名(吉野川市立高越小学校)
対象(学校全体・学年(学級)その他)

【引き出す工夫】

- 学校全体の課題から、5年生で「あいさつ運動」「トイレのスリッパ増え隊」「廊下を歩きたくなる大作戦!」「ふわふわ言葉を使おう」「聞き方名人になろう」の班を結成し、学校生活をよりよくするため、班の目標に向けた活動を見なが主体となって計画。

【引き出す工夫の写真】

折り鶴を廊下↓

【児童の望ましい行動】

学校の課題を見つめる
取組を振り返る
解決策を実行する

解決策を考える

【繰り返しやすくする工夫】

- シールを掲示用の紙に貼る。
- 掲示用紙は親子みやすいものに。
- 紙芝居を作り低学年に読み聞かせ。
- 廊下に置く鶴を低学年で作る。
- 挨拶運動は地域の方と一緒に。
- 迷路やパズル・プログラミングしたゲームで楽しく取り組める。

【繰り返しやすくする工夫の写真】

【成功のポイント】

- 児童が主体となって行うことで、責任感を持って活動に取り組めるようになる。
- 自信を持って取り組むために、「うまくいかなくても改善して取り組もう」という意識の醸成。
- 無理なく持続的に活動するために、モジュール時間等を活用する。

【取組の発信!】

- 職員内での共有
- 期会での発信
- 他学年への啓発
- 学校HPへの掲載
- 地域の方と一緒に実践

東みよし町立加茂小学校

自分の目標を達成しよう

学校名(東みよし町立加茂小学校)
対象(学校全体・学年(学級)その他)
特別支援学級

【引き出す工夫】

- 自分で目標設定をする(自立活動)。
- 個々に応じたスケジュールを作成。
- 適切な言葉づかいを示した絵カードの活用。
- 姿勢や話の聞き方の見本を示したカードを見るところに貼る(前の席のいすの後ろに貼っている)。
- アンガーマネジメント(自立活動)。

【引き出す工夫の写真】

絵カード よい姿勢
スケジュール

【児童の望ましい行動】

学習課題に取り組む

【繰り返しやすくする工夫】

- できたことはその場で称賛。
- 毎日、目標の確認とフィードバック。
- 目標達成シートにシールを貼る。
- 「すてきノート」など頑張ったことを紹介。

【繰り返しやすくする工夫の写真】

【成功のポイント】

- 児童の意見を取り入れて、目標設定をしたこと。
- 見本や約束事がすぐに確認できるように、見るところに掲示(セジックテープで取っ替えしやすくなる)。
- 交流学級担任と密に情報交換し、特別支援学級で決めた約束やお互いの学級でがんばったことやうまくいったことを共有したこと。

【取組の発信!】

- 校内支援委員会主催で、自立活動の内容や支援ツールなどを紹介。
- 自立活動の内容や達成度を連絡ノート等で保護者へ伝える。

【講評】 行動支援において、「支援方法の効果の大きさ」は当然重要ですが、それと同時に考慮すべきは「その支援方法がどれほどその場面に自然に溶け込んでいるか」という点です。どんなに効果が高い方法でも、学校の場面に適していない場合、持続的な使用が難しくなります。この観点から、折り鶴を活用した「自然な行動変容に繋がるアイデア」は特に印象的です。

【講評】 児童自身が目標を設定したことが、児童の望ましい行動を増やすことに繋がっており、とても良いです。望ましい行動に対して、先生がポジティブなフィードバックを行うことに加えて、他の児童や保護者からのポジティブなフィードバックを引き出す工夫(「すてきノート」など)も合わせて行われているところが素晴らしいです。

動画部門

ゴールド賞

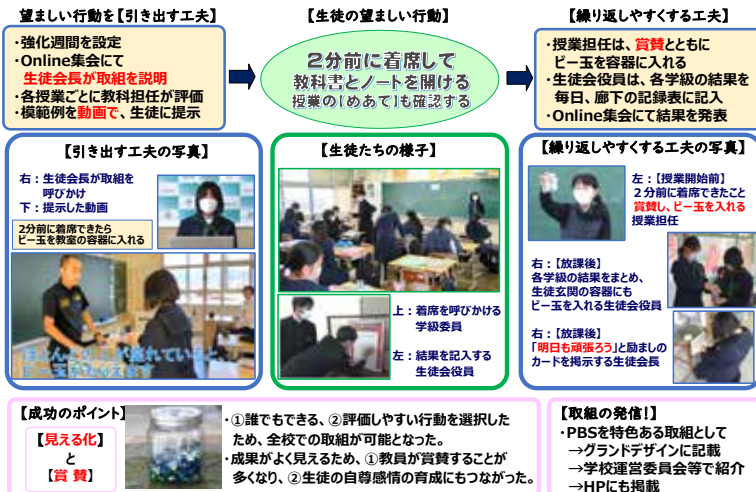
エントリーシート部門

ゴールド賞

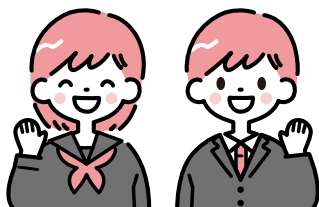
吉野川市立鴨島東中学校

2分前着席をして、みんなで成績UP!

学校名(吉野川市立鴨島東中学校)
対象(学校全体)・学年・学級・その他



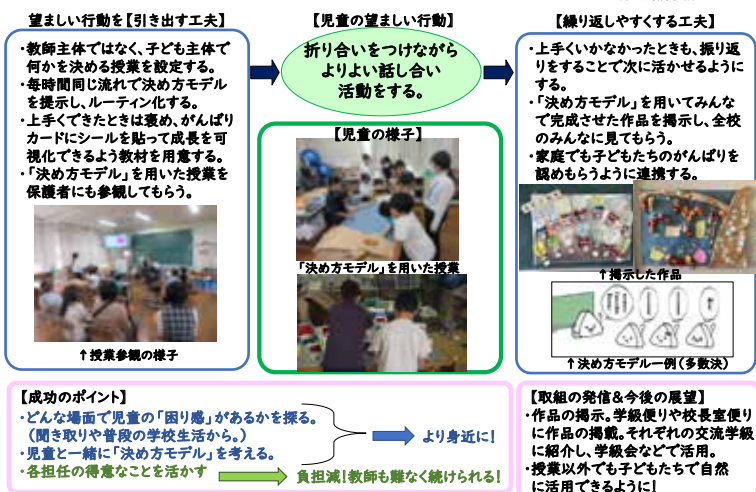
【講評】学級委員や生徒会の役員等の生徒たちが、積極的に活動の中心になって取り組んだという点が、生徒の主体性を育てるという意味で、すばらしいです。このしかけが、生徒たちの自尊感情の育成にも繋がったのだと思うと思います。また、成果を見える化したことは、生徒たちにも教員にも励みになっています。



石井町高原小学校

みんなで気持ちよく決めよう!

学校名(石井町高原小学校)
対象(学校全体・学年・学級・その他)
特別支援学級



【講評】決め方モデルという、まさに「児童の幸せにつながるポジティブな行動」を取り上げて、具体的に練習しているところがすばらしいです。交流学級や家庭とも共有しているところも最高ですね。



執筆・監修 野田 航(大阪教育大学准教授)

編集後記

本県のPBSの取組は、「通常の学級に在籍する特別な支援や配慮を必要とする子どもたちの支援は、担任一人の力ではどうにもならない。チーム学校として学校全体でシステムの取り組むべきだ」という、一人の教員の想いからスタートしました。平成26年度に一つの学校でモデル的に始まった小さな取組ですが、今や、県下に浸透するまでに広まりました。

今年度、県内の好事例を取集し各校の取組の参考にしていただくことを目的として、「とくしまPBSアワード」を初めて開催しました。初めての取組でしたので、どれだけの学校が応募してくださるか楽しみな反面、正直少し不安もありましたが、応募された取組は、どれもオリジナリティ溢れるすてきな取組ばかりで、私たちは感動を覚えました。小学校低学年の児童たちがアイデアを出し合い学校全体を動かした取組や、生徒指導・人権教育の視点にカスタマイズされた取組もありました。私たちが把握していた以上に、たくさんの方の学校でPBSの有効性が理解され、児童生徒主体の取組として根付いていることを知り、大変頼もしく、嬉しく思いました。

今、本県のPBSの取組は第2ステージを迎えています。県内全ての園・校で取り組んでくださっているPBS。次は、各園・校の取組の「実行度を高める」ことを目指します。

PBSは、子どもたちと教員の思いを形にする取組です。そして、子どもたちも教員も幸せになれる取組です。「PBSをとくしまのあたりまえにするために、新しい一歩を踏み出しましょう。」

パワーアップセミナー 参加校募集

本年度から、各園・校の取組の情報共有と推進の支援を目的にパワーアップセミナーを開講しています。詳細は令和6年度4月に各園・校へ案内いたします。



PBS
PR動画
公開中★